News Letter　2008.12.5　第 19 号

たちばな
京都大学女性研究者支援センター
Center for Women Researchers

平成 20 年度高校生車座フォーラム

さる１０月１８日（土）に、第三回車座フォーラムを開催しました。昨年までは参加を女子高校生に限定していましたが、今年から、男子高校生にも参加の枠を広げての開催です。これまで参加した女子生徒からも、男子生徒も参加できるようにしてはどうか、女子だけに限定するのではなく、男子も女子も一緒に参加できるほうが自然な感じがするといった意見がありました。また、女性研究者を支援するということは、同時に、女性研究者と助け合いつつ、共に生きていくという眼をもった男性をより多く育てていくことでもあるという男女共同参画の視点を大切にしました。結果、全体の参加生徒は 41 名で、その内訳は、女子が 36 名、男子が 5 名でした。参加生徒のなかでは男子は少数派ではありましたが、みなさん積極的に質問したり、議論したりと、のびのびと愉しんでいる様子でした。また、講師陣も、今まで以上に男性教員の数を増やしました。車座フォーラムは、専門分野や所属部局が異なるために、普段なかなか顔を合わせることのない大学教員や院生が、高校生に語りかけるこの場で出会う場でもあります。また、このフォーラムは、高大連携事業の一環として、高校生に大学や研究者について、大学という現場に来て、その雰囲気を味わってもらうとともに、直に研究者と接することで、研究という仕事、研究者として生きることなどについて、知ってもらおうという企画です。特に、出産や子育て、介護など家庭生活で起きる様々なことと、大学での研究とをいかにしてバランスよくコーディネートしていくかということは、女性にとっても男性にとっても大きな課題です。早い段階からこうした課題を知り、自分の人生設計や職業選択を色々な観点から考えていくための機会になればと考えています。

これまでは京都大学の歴史的建造物である清風荘の畳の間で開催してきましたが、40 名を超える参加者に対応するには手狭なため、今回は、文学部新館の教室や演習室で開催しました。大学が高校生に対して開催している催し物としては、毎年８月に行われるオープンキャンパスがありますが、車座フォーラムは、大学の教員や院生らと少人数単位で話すという対話型を基調にしている点が特徴です。

まずは、西村周三・副学長・理事、女性研究者支援センター長の稲葉カヨ・生命科学研究科教授のご挨拶に続き、オープニングセッションが行われました。セッションでは 15 名の講師陣が、それぞれの専門分野や研究者になったきっかけなどについて紹介しました。自分はなぜ京都大学を受験しようと思ったのか、どんなきっかけで研究者になったのか、研究の楽しさや苦労など講師たちの体験談には、参加者もみな熱心に耳を傾けていました。昼休みをはさんで開催された午後の分科会では、参加者の希望に応じてグループに分かれ、生徒 13, 4 人に講師が 5 人という編成で、さらに具体的な話を中心に密度の濃い話し合いが行われました。松本新総長もすべての分科会に短い時間でしたが参加されました。自分が研究者になったいきさつなどを紹介し、質問をした生徒には生い立ちを写真でビジュアルに表した名刺を記念に渡しておられました。

最後に再び集まって行われた全体会では、各分科会での話し合いの内容に関する報告を受けた後、高校生からの様々な質問に講師たちが答える質疑応答の時間が設けられました。研究をしていて行き詰ったときはどうするのか、研究者になってよかったこと、困ったことは何か、研究テーマはどうやって選ぶのか、研究のための資料収集の方法は？など研究についての質問や、子育てをしながら研究を続けることは可能か、といった仕事と家庭生活とのバランスのとり方についての具体的な質問も出ました。さらに、環境保護や、児童虐待といった現代の問題に対してどのように考えたらよいかなど、鋭い質問もあり、答える講師陣も真剣そのものでした。高校生がかなり早い時期から研究職に関心を抱き、また進路選択の一選択肢として研究者という仕事を具体的に考えていることがよく伝わってきました。今回はとりわけ、研究職の内容や、研究職につくための手立てについて、また、研究上の発見やひらめき、研究への構えといった、研究職、研究という仕事に関するかなり具体的かつ深い質問が目立ち、高校生の意識の高さが印象的でした。高大連携の重要性が高まってきている現在、車座フォーラムは、京都大学らしい高大連携の１つの形として、より魅力的な事業になるよう今後もさらなる展開の可能性を模索し続けていきたいと思います。

地域連携事業 WG 主査　鈴木晶子

■参加校

京都府立嵯峨野高等学校、桃山高等学校、洛北高等学校、京都市立塔南高等学校、日吉ヶ丘高等学校

■参加教員

稲葉カヨ（生命科学研究科・教授）、伊藤公雄（文学研究科・教授）、氣多雅子（文学研究科・教授）、斎木 潤（人間環境学研究科・教授）、鈴木晶子（教育学研究科・教授）、冨谷 至（人文科学研究所・教授）、松原英一郎（工学研究科・教授）、間宮陽介（人間環境学研究科・教授）、横山美夏（法学研究科・教授）、赤松美紀（農学研究科・准教授）、岩崎奈緒子（総合博物館・准教授）、久家慶子（理学研究科・准教授）、藤井律之（人文科学研究所・助教）、山末英嗣（エネルギー科学研究科・助教）、渡邊裕美子（理学研究科・助教）

連載：研究者になる！－第 15 回－

こころの未来研究センター長
吉川左紀子

心理学の勉強がしたいと思い始めたのはいつ頃だっただろうか。学生紛争も終わりかけた 1970 年代前半に京大文学部に入学し、教養部で興味本位にいろいろな授業をとっていたのだが、心理学や精神医学の講義にとりわけ熱心に出ている自分に気づいたのは２回生のとき。しかし、当時文学部で開講されていた知覚心理学・学習心理学などの実証系の心理学にあまり関心がもてず、教育学部で臨床心理学を勉強しようと決心して３回生の４月に転部した。集中講義に、「有名人」の先生が来るとわくわくして講義にでかけて行ったり、高価な哲学の本を買って、ちゃんと読みもせずに本棚に並べてうれしくなる、といったミーハーな（？）学部時代だった。大学院に進むときも、研究者になろうという意識はあまりなくて、ただ「大学で研究すること」にあこがれていたのだと思う。その後、いろいろ考えた末に、結局、実証系の心理学である認知心理学を選択したのだが、「研究者になる！」という高い志をもってというよりは、「今やっている研究テーマをもう少し続けたい」「飽きたら別のことをやってみよう」といった意識だった。

研究の世界にもそのときどきの流行があって、当時の認知心理学では相当マイナーな、「顔の認知」というテーマを選んだ私は、学会に行っても同じテーマで研究している人にはほとんど会わない、という時期が長かった。最近では、顔や表情に関わる研究は、認知、感情、社会、生理など心理学の多くの分野で取り上げられる「ホットな領域」のひとつになっており、おもしろい研究論文も次々に発表されるので、追いかけるのが大変なくらいである。「あの頃、諦めなくて良かったな」としみじみ思う。なので、心理学を専攻する若い人たちが「研究テーマの選択に悩んでいる」という話しを聞くと、「人はどうであれ、自分がやっていて楽しいこと、自分にとってこれが大事だと思えることを選びなさい」と言っている。そして、一度選んだら、自分なりの結論が出るまでは脇見をしないことが大切だ。こういう選択が可能になるには、それを許す「まわりのおおらかな環境」と、「失敗してもめげない心」という前提があってのことだが、幸い京都大学は、おおらかさにかけては伝統のある大学だから、あとは自分次第である。

私の今の関心事は、人が他者のこころを知り、他者に自分のこころを伝えて、共感し合う（あるいは誤解し合う）こころのしくみである。心理学の教科書的に言えば、「対人認知・対人相互作用」という領域だ。さらに、人と人との相互作用によって、当事者や、周囲の第三者の意識や行動が、一時的にしろ永続的にしろ、変わってゆくしくみを知りたいと思う。そこに人のこころの成長の秘密があると思うからだ。この点を学問的に深く考えてゆくには、目の前にいる人とのやりとりだけでなく、記憶や知識の中の人、想像上の人などいろいろな他者を想定して、それぞれの影響力の及ぶ仕組みを科学的な手続で検証する必要がある。今のところはまだ、「目の前にいる人」の研究で手一杯なので、想像上の人（たとえば、あこがれの人や理想の人）の影響にまでたどり着くのはずっと先だろうが、その日をめざして、若い人たちと顔・表情認知や感情理解に関する研究を続けている。このごろ、ふとした拍子に、亡くなった両親とこころの中で対話している自分に気づくことがある。脳内で生じる自問自答、と言ってしまえばそれまでだが、自分の中にいる他者との対話、と考えると、そのプロセスはなかなか複雑だ。そうしたこころの性質まで、いつか心理学的に解明できればと夢想している。

心理学を研究しています、と自己紹介すると、こころのように目に見えないものをどうやって研究するのか、と質問されることが多い。実験データ、調査資料、言葉による記録といった形で示される「こころ」は、日常的な直感とは結びつきにくいが、研究のプロセス自体は、ほかの学問分野と変わるところはない。こころの研究の特殊性というか難しさがあるとすれば、おそらくその先だろう。こころの研究は、たとえ基礎研究であっても、日常生活の中での人の考えかたや行動と直接間接に結びつき、それに影響を及ぼしたときに初めて真の学問的貢献といえる。こころの研究者は、自分の研究の守備範囲をそうしたところまで含めて考えることが大切だと思っている。

研究者になろうという明確な意識がないまま、心理学の研究を続けてきたが、いつの間にか「心理学的なものの見方、考え方」が「私」の一部になっているような気がしている。とくに、現在の職場で専門領域の違う先生がたと話しをする機会が増えてから、そうした「見方の違い」を感じてとても新鮮な気持ちになる。その学問によってその人の人生観や価値観がいつの間にか作られる、研究者になるとは、そういうことなのかもしれない。

Center for Women Researchers

〒 606-8303　京都市左京区吉田橘町
電話　075（753）2437
FAX　075（753）2436
E-mail　w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

アサーション・トレーニング入門

「言いたいことをはっきりと、うまく伝えるために」
NPO 法人　女性と子どものエンパワメント関西理事長
田上時子

あらゆる種類の暴力は、必ず力のある側からない側にいきます。暴力を防ぐには、力のある側が自分の力を認識し、その力の差を乱用しないことです。コミュニケーションが対等に成り立っている関係のなかでは、暴力は起こりません。そこで、エンパワメントという理論が必要になってきます。力のない側が内なる力をもう一度取り戻すという考えがエンパワメントです。これをやろうと思ったのが、カナダから日本に帰ってきたばかりの 20 年前の私で、現在に至っています。

日本では、アサーション（assertion）という言葉よりも先に、アサーティブネス（assertiveness）という言葉が、フェミニストのなかで使われていました。アサーティブネスというのは、アサーションと一緒で、消極的でなく、攻撃的でなく、でも自己主張的にということです。自分の思いをきちっと伝えるということは、単なる言葉だけではありません。態度も含めてのことです。私の定義では、アサーティブネスとは、誰の話もちゅうちょなく聞けて、わかって、理解できて受け止められて、そして自分が感じること、考えること、見たこと、要求することを話せるということです。

コミュニケーション力は、表現する訓練のほうがずっと簡単です。相手が非常に上手な聞き手だったら、話しやすくありませんか？　実は話し手というのは、聞き手によるのです。人の話を聴き取るときに、何か聴きにくいとか、この人の話はいいけど、ここのところにきたら、私は聴きにくいとかというのはありませんか？　それはリスニング・ブロック（Listening Block）があるからです。リスニング・ブロックは、人の話を聴きにくくさせるもので、「くらべる」「心を読む」「リハーサルする」「ふるいをかける」「決め付ける」「考えにひたる」「自分にひきつける」「アドバイスする」「言い争う」「わたしは正しい」「急に話題を変える」「なだめる」の 12 個あります。持っていたらだめだということではありませんよ。みんなが持っている癖みたいなものですが、悪い癖だったら変えたほうがいいですよね。また、人の話を聴くときには、効果的に聴く、アクティブ・リスニング（Active Listening）が必要です。ポイントは、「能動的に聴く」「共感して聴く」「心を開いて聴く」「注意して聴く」の 4 点です。私は、子どもへのエンパワメントをやっていますので、親、学校の先生など力のある側に、いい聴き手になって欲しいと思います。それによって、子どもはいい聴き手にも、いい話し手にもなれるのです。

今度は、表現する側にたったときのことを考えましょう。私たちが人と話をし、表現する内容は「観察・事実」「考え」「感情」「ニーズ」の 4 つに分かれます。私たちは「思う」という動詞をよく使いますが、これが曲者です。自分の考えを言っているときは、人と意見が違えば、どんどんやり合えばいい。でも、感情のときにやり合う必要はまったくありません。私の感情と、相手の感情は違いますから、私がその人の感情に引きつられる必要もありません。相手の感情を私が聴けるかどうかは、コミュニケーション・スキルとして非常に重要なのです。自分がいま、何を言っているかわからなくなったときは、ちょっと立ち止まって、自分が使っている「思う」という動詞を「感じる」と「考える」に置き換えてみて下さい。自分の話が、感情と考えのどちらかというのがわかると、聴いている側が聴きやすいのです。その上で、自分が何を考え、何を感じ、何を思っているか。相手に効果的に伝えるために、「直接的であること」「その場で伝えること（時間をおかないこと）」「明瞭にすること」「支援的・援助的であること」が必要なのです。

ストレス、うつ、自殺、引きこもりなどいろんな事件が起こりますが、今、コミュニケーション・スキルがもてはやされているのは、すべての問題は感情にあるからです。みなさんが、人として生きにくく、トラブルでしんどかったことは感情に関係ありませんか？　にもかかわらず、感情については、あまり議論されない。みんな、感情で悩み、幸せになりたいと思っています。

感情にいいも悪いもないのです。悲しい感情も、楽しい感情も、うれしい感情もすべて感情なのです。けれども、私たちが感じたい感情と、感じたくない感情がありますよね。それは自分で分ければいいのです。世間から言われるようなものではありません。感情は変化するものですから、腹が立って、ずっとうつにならなくても、自分しだいで感情は変化できます。それが感情の性格です。怒るのは悪くないのです。だけど、怒って腹が立ったからと言って、人をたたいてはいけません。感情と行動は別のものです。それから、感情の表現もさまざまです。しゃべるだけでなく、絵を描くことや音楽で感情表現をする人もいます。それでいいのです。自分のことを話せば、気が楽になるように、感情というのは出せば穏やかになるという性格なのです。だから小出しにすればいいのです。感情には段階があって、ものすごく高まっているときには、人は冷静にはなれません。暴力などの事件は、こういう状態の時に起こります。まずは、何かアクションを起こして、気分を鎮めることです。その対処法に、これというものはありません。あったら、ノーベル賞ものだし、こんないろんな事件は起こりません。

自分のストレスに向き合うには、音楽を聴くとか、散歩するとか自分を幸せにさせてくれるツールのタイプを知り、ストレスに対して、アクションを起こすことです。ストレスマンメージメントとは、そういうものなのです。

【女性のための相談室　開室日】　利用には予約が必要です。
12 月 5 日、12 日、19 日、26 日　　1 月 9 日、16 日、23 日、30 日　　2 月 6 日、13 日、20 日、27 日

出前講義「木のプラスチック化・液化及びプラスチックとの複合」

ーバイオマス新素材への道ー
京都大学農学研究科准教授
吉岡まり子

平成 20 年 9 月 27 日 (土) に奈良県の閑静な山の手にある西大和学園高等学校で、縁あって出前講義を行うこととなった。

西大和学園は、文部科学省に申請し、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受けている。同校では、「京都大学、奈良先端科学技術大学院大学等や研究機関等で第一線で活躍する研究者の協力を得て、講演・講義を実施し、最先端の科学技術研究に関する理解を深め、知的好奇心、探究心を高めること、理系学部進学希望者に明確な目標を持たせる進路指導法の研究開発」という研究課題のもとに、本年も 6 月から 10 月初旬頃まで、約 10 回ほど、主に、高校 1 年生を対象として SSH 講義が行われている。

私の専門は、バイオマス複合材料化学である。主として植物バイオマスのプラスチック化や液化を行い、各種成形物や発泡体へと応用したり、他のプラスチックとの複合化、さらには有機、無機ナノフィラーを添加した高性能・高機能ナノコンポジット等の研究を進めている。その関連で、講義の題名を「木のプラスチック化・液化及びプラスチックとの複合―バイオマス新素材への道―」とし、地球温暖化の原因である空気中の CO_2 濃度の増加を抑制するため、その手段の一つとして、カーボンニュートラルであるバイオマス利用の開発がどのようにして展開されているかを高校生向けに OHP を組み立て紹介した。所属研究室の名誉教授の先生が研究所長を勤めておられる上越市の企業によって製造された「ポリプロピレンをマトリックス樹脂とし、非食用古古米が 53%混合されたクリヤファイル」、及び参考資料として、国策事業である「バイオマス・にっぽん」のパンフレット類を配布し、バイオマスの利用がかなり現実的なものとして発展してきていることを実感させようと試みた。また、進路を考えるための一助として本年のオープンキャンパスで利用された「京都大学農学部ガイドブック」を先の試料及び資料と併せて配布し、講義の最初に数枚の OHP で、農学部の紹介を行った。

講義終了後、研究内容の質問に加えて、進路についての相談も数件あった。彼らが少なからずバイオマス研究に興味をもってくれたことを嬉しく思ったと同時に、人生の岐路にいて、その方向の決定に当たり、的確なサポートを必要としていることを強く感じさせられた 1 日であった。

センターからのお知らせ

■国際シンポジウム『女性研究者が創り出す研究・教育の未来に向けて』

日時：2008 年 12 月 15 日（月）　13：15 ～ 16：40
場所：芝蘭会館　稲盛ホール（医学部構内）
ープログラムー
開会の挨拶　大西珠枝（京都大学理事・副学長）
基調講演：女性研究者の課題と将来の展望「マルチキャリアパス支援」を通して
　　後藤祥子（日本女子大学長）
報告 1 ：諸外国の女性研究者事情　　【同時通訳あり】
　　Prof. Annina Chiarloni (The University of Torino)
　　Prof. Franca Balsamo (The University of Torino)
　　Prof. Angela Miles (University of Toronto)
報告 2 ：女性研究者支援センターの京都大学における役割
　　稲葉カヨ（京都大学女性研究者支援センター長）
討論
閉会の辞　　伊藤公雄（京都大学女性研究者支援センター推進室長）

■女性研究者の就労形態に関するアンケート調査協力のお願い

女性研究者の就労環境の実態を明らかにし、よりよい就労環境の整備を大学へ求めるため、京都大学に所属する女性研究者（日本学術振興会特別研究員を含む）に、アンケートのご協力をお願いしております。
12/14（日）締切ですので、個別に送付しました依頼文書をご参照いただき、アンケート回答にご協力いただきますようお願いいたします。

■稲葉カヨ　センター長が、松本総長の新体制の下で「理事補」に就任（2008.11.1）

男女共同参画を含む総務・人事・広報担当の大西珠枝理事の補佐で、仕事の内容は、学生・教員の男女共同参画の推進と研究者補助です。